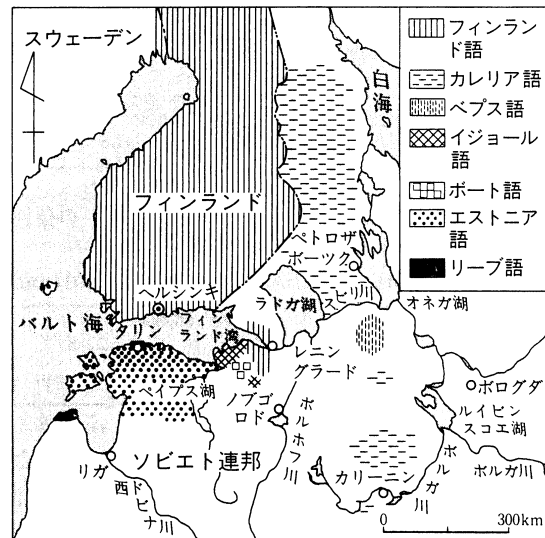


〈図〉 バルト・フィン諸語の分布



出典：ラーネスト(A. Laanest, 1982)による。

〈表 1〉 バルト・フィン諸語の分類

言語名	固有名	母語とする話者数(1989年)
A) 北バルト・フィン諸語		
フィンランド語 [Finnish]	suomen kieli (suomi)	約 500 万人
カレリア語 [Karelian]	karjalan kieli	約 63,000 人
ベプス語 [Veps(ian)]	vepsan(bepsan) kel	約 6,500 人
イジョール語 [Izhorian]	ižoran kēli	約 300 人
B) 南バルト・フィン諸語		
ボート語 [Vote(Votic)]	vađ'd'ā tšēli	?
エストニア語 [Estonian]	eesti keel	約 100 万人
リープ語 [Livonian]	livē kēļ	100 人以下

注：言語名欄の〔 〕内は英語名。

バルト・フィン諸語 英 Baltic-Finnic languages, 独 ostseefinnische Sprachen, 仏 langues balto-finnoises, 露 прибалтийско-финские языки, フィンランド itämerensuomalaiset kielet

北欧, バルト海の東北部, フィンランド湾の沿岸を中心に分布する, ウラル語族のフィン・ウゴル語派に属する諸言語の総称で, フィンランド語(*fi.* と略す), カレリア語(*ka.*), ベプス語(*vps.*), イジョール語(*iz.*), ボート語(*vot.*), エストニア語(*est.*), リーブ語(*liv.*)の7つの言語が含まれる(図, 表1を参照)。

7つの言語のうち, 現在, 標準語があり, 書き言葉をもつのは, フィンランド語とエストニア語だけである。ボート語の話者数については, 公式の統計がないが, ある推定によれば, 1970年代の前半に, 話者が100

人以下であったと言われる。

バルト・フィン諸語は,

- 1) 中舌非円唇半狭母音 /ō/ が存在するかどうか,
- 2) 動詞の条件法の標識が -ksi- 系か -isi- 系か,
- 3) 3人称の人称代名詞として, 指示代名詞と異なる形が発達しているかどうか,

などの基準を用いて, 北バルト・フィン諸語, 南バルト・フィン諸語の2つのグループに分けられることがある(表2を参照)。

現在のバルト・フィン諸語とサーミ語(ラップ語)の共通の祖語として想定されている言語形態を、「フィ

〈表 2〉 北バルト・フィン諸語と南バルト・フィン諸語の比較

	フィンランド語 (北グループ)	エストニア語 (南グループ)
1)	pelto, polvi 「畑」, 「ひざ」	põld, põlv 「畑」, 「ひざ」
2)	tul-isi-n (tulla「来る」の条件法1人称単数)	tule-ksi-n (tulema「来る」の条件法1人称単数)
3)	tämä, nämä 「これ, これら」	tema/ta, nemad/nad 「彼, 彼ら」
	hän, he 「彼, 彼ら」	

ン祖語 (kantasuomi, Proto-Finnic, Urfinnisch) とよぶ。フィン祖語の時代は、「前期フィン祖語 (varhaiskantasuomi [vks. と略す], Early Proto-Finnic, Frühfinnisch; 1500~1000 B. C.)」と「後期フィン祖語 (myöhäiskantasuomi [mks. と略す], Late Proto-Finnic, Spätfinnisch; 1000 B. C. ~ 0)」の2つの時代に分けられる。サーミ語は、前期フィン祖語時代の末期に、バルト・フィン諸語と分かれたものと考えられており、したがって、前期フィン祖語を、たとえば「フィン・サーミ祖語」、後期フィン祖語を「バルト・フィン祖語」とよぶこともできる。

バルト・フィン諸語の中で、もっとも古いテキストがあるのはカレリア語で、13世紀のものとして推定される白樺の樹皮に書かれた3行の呪文が、ノブゴロド (Hobropod) で、1957年に発見されている。エストニア語の現存するもっとも古いテキストは、1520年代に書かれた「クラマー (Kullamaa) の祈禱書」とよばれる手稿であり、フィンランド語の場合は、1543年に印刷されたアグリコラ (Mikael Agricola) の『ABCの本』(Abekiria) が最古のテキストである。

【音韻】 バルト・フィン諸語に特徴的な形態音韻論的現象とされる階程交替 (astevaihtelu, gradation, Stufenwechsel) は、起源的には、無声閉鎖音 p, t, k にのみ関わる現象であり、子音階程交替 (consonant gradation) ともよばれる。階程交替は、ベプス語とリープ語にはみられないが、サーミ語にも同様

〈表 3〉 後期フィン祖語における階程交替

A) 量的交替	B) 質的交替
pp ~ <i>ṗp</i>	p ~ β/b
tt ~ <i>ṡt</i>	t ~ δ/d
kk ~ <i>ḱk</i>	k ~ γ/g

の現象があり、フィン祖語に遡る現象と考えられている。

後期フィン祖語の時代には、母音間、および、子音 r, l, m, n, ŋ と母音との間に現われる無声閉鎖音およびその長音 (重音 geminate: pp [pː], tt [tː], kk [kː]) には、音節の構造と強勢のパターンの違いに条件づけられた、調音の差異に基づく2つの異音があり、規則的に交替していたとされる。この交替には、無声の長音と半長音 (*ṗp* [pː], *ṡt* [tː], *ḱk* [kː]) の間の量的交替 (quantitative alternation), および、無声閉鎖音と、有声摩擦音 (β [β], δ [δ], γ [γ]) または有声閉鎖音 (鼻音のうしろで) との間の質的交替 (qualitative alternation) とがあった(表3を参照)。量的交替における長音と質的交替における無声音を、階程交替における強階程 (strong grade) とよび、量的交替における半長音と質的交替における有声音を、階程交替における弱階程 (weak grade) とよぶ (→フィンランド語, エストニア語)。

階程交替は、交替の起こる位置によって、語根階程交替 (radical gradation) と接尾辞階程交替 (suffixal gradation) とに分けられる。

語根階程交替は、名詞、形容詞、動詞の活用や、語の派生の際に、語幹の子音に起こるパラディグマティックな交替である。強弱どちらの階程が現われるかは、接尾辞が付くことによって、問題の子音の直後の音節が閉音節になるかどうかに応じて決まる。すなわち、問題の音節が閉音節になるなら弱階程、閉音節にならなければ強階程が現われるのが、後期フィン祖語における階程交替の現象であった(表4を参照)。

接尾辞階程交替は、子音ではじまる接尾辞の先頭の子音の交替で、強弱どちらの階程が現われるかは、直前の音節が強勢 (主強勢, 副強勢の別を問わない) をもつかどうかに応じて決まり、強勢のある音節のあと

〈表 4〉 語根階程交替

	単数主格	単数属格	単数分格	複数主格	
量的交替:	<i>katto</i>	<i>kaṡton</i>	<i>kattða</i>	<i>kaṡtot</i>	「屋根, 天井」
質的交替:	<i>jalka</i>	<i>jalṡa</i>	<i>jalkaða</i>	<i>jalṡat</i>	「足」
	フィンランド語	カレリア語	イジョール語	ボート語	エストニア語
<i>mks. *jalka &gt;</i>	jalka	jalka	jalga	jalka	jalg
<i>mks. *jalṡat &gt;</i>	jalat	jallat	jalaḡ	jalgaḡ	jalad

〈表 5〉 接尾辞階程交替

	単数主格	単数分格	単数主格	単数分格	
〈分格語尾〉	<i>mā</i> 「国」 :	<i>māta</i> ~	<i>kala</i> 「魚」 :	<i>*kalaða</i>	
〈現在分詞標識〉	不定詞語幹 <i>sā</i> -「得る」:	現在分詞 <i>*sāpa</i> ~	不定詞語幹 <i>sano</i> -「言う」:	現在分詞 <i>*sanofa</i>	
	フィンランド語	カレリア語	イジョール語	ポート語	エストニア語
<i>mks.</i> <i>*māta</i> >	<i>maata</i>	<i>muada</i>	<i>māDa</i>	<i>māta</i>	<i>maad</i>
<i>mks.</i> <i>*kalaða</i> >	<i>kalaa</i>	<i>kalua</i>	<i>kallā</i>	<i>kal(l)ā</i>	<i>kala</i>

なら強階程, そうでなければ弱階程が現われた(表5を参照). 接尾辞の階程交替は, 質的交替に限られている. 接尾辞階程交替は, 類推がはたらいたことにより, 強階程と弱階程の本来の分布が失われ, 現代語では, 接尾辞の異形態の交替として, 痕跡的に認められるにすぎない. このため, 現代語について階程交替を論じる場合には, もっぱら語根階程交替を問題にするのが普通である.

母音調和の存在も, バルト・フィン諸語の特徴の1つであるが, リーブ語で消失しているほか, ベプス語でも体系性を失っている. エストニア語の場合, 南エストニア語には母音調和がみられるが, 北エストニア語では消失しており, したがって, 後者に基づくエストニア標準語には母音調和はない.

フィン祖語時代の子音変化のうちでは, いわゆる「*ti* > *si* 変化」とよばれる *t* の摩擦音化が, とりわけ重要である. この変化により, たとえば, 2人称単数の人称代名詞の語頭の子音, すなわち,

*vks.* *\*tinä* > *fi.* *sinä*, *ka.* *sie*~*šie*, *vps.* *sina*,  
*iz.* *śinā*, *vot.* *siä*, *est.* *sina*, *liv.* *sinā*

や, 一部の名詞(形容詞)の語幹における *t* と *s* の交替, すなわち,

*vks.* *\*käte* > *\*käti* > *fi., est.* *käsi* 「手」:  
単数属格 *\*käden* > *fi.* *käden*, *est.* *käe*; 単数分格 *\*kättä* > *fi.* *kättä*, *est.* *kätt*; 単数入格 *\*kätehen* > *fi.* *käteen*, *est.* *kätte*; 複数分格

*\*kätiðä* > *fi.* *käsiä*, *est.* *käsi*  
が説明される.

さらに, この子音変化は, バルト系借用語にも起こっている.

*fi.* *silta*, *est.* *sild* 「橋」, *cf.* リトアニア語 *tiltas*, ラトビア語 *tilts*

これに対し, ゲルマン系借用語には起こっていない.

*fi.* *tauti* 「病気」, *est.* *taud* 「伝染病」, *cf.* ノルウェー語 *daude* 「死」, スウェーデン語 *död* 「死」

このことは, バルト・フィン諸語における, バルト系とゲルマン系の借用語の相対的な借用年代を推定する決め手となる.

#### [文法]

1) 名詞の格 バルト・フィン諸語は, 一般に, 名詞の格の体系が豊かであり(表6を参照), 14前後の格を数えるのが普通である. 格の数が多い原因の1つに, 場所関係を表わす格(場所格 *local cases*)の体系の発達があげられる(表7を参照). フィンランド語やエストニア語の場合, 場所格には, 「~の内部へ/で/から」を表わす内部格(*inner local cases*)と, 「~の表面(近傍)へ/で/から」を表わす外部格(*outer local cases*)の2系列, あわせて, 6つの形がある.

文法格(*grammatical cases*)とよばれる格では, 直接目的語を表示する格としての「対格」が, 人称代名詞(フィンランド語の人称代名詞の対格語尾 *-t*)を除いて, 形態論的なカテゴリーとしては存在しないと

〈表 6〉 名詞 *kala* 「魚」の単数の活用(一部)

	フィンランド語	カレリア語	ベプス語	イジョール語	ポート語	エストニア語	リーブ語
主格	<i>kala</i>	<i>kala</i>	<i>kala</i>	<i>kala</i>	<i>kala</i>	<i>kala</i>	<i>kalà</i>
属格	<i>kalan</i>	<i>kalan</i>	<i>kalan</i>	<i>kalan</i>	<i>kalā</i>	<i>kala</i>	<i>kalà</i>
分格	<i>kalaa</i>	<i>kalua</i>	<i>kalad</i>	<i>kallā</i>	<i>kalā</i>	<i>kala</i>	<i>kaʔllā</i>
入格	<i>kalaan</i>	<i>kalah</i>	<i>kalaha</i>	<i>kallān</i>	<i>kalā(sē)</i>	<i>kalasse</i>	<i>kaʔllā(z)</i>
内格	<i>kalassa</i>	<i>kalašša</i>	<i>kalas</i>	<i>kallāz</i>	<i>kalaza</i>	<i>kalas</i>	<i>kalàs</i>
出格	<i>kalasta</i>	<i>kalašta</i>	<i>kalas</i>	<i>kallāst</i>	<i>kalassa</i>	<i>kalast</i>	<i>kalàst</i>
向格	<i>kalalle</i>	<i>kalalla</i>	<i>kalale</i>	<i>kalalen</i>	<i>kalalē(sē)</i>	<i>kalale</i>	—
接格	<i>kalalla</i>	<i>kalalla</i>	<i>kalal</i>	<i>kalāl</i>	<i>kalalla</i>	<i>kalal</i>	—
奪格	<i>kalalta</i>	<i>kalalda</i>	<i>kalal</i>	<i>kalāld</i>	<i>kalalta</i>	<i>kalalt</i>	—

〈表 7〉 場所格の体系

## 〔内部格〕

入格 (illative) \**-sen*~\**-zen* 「～の内部へ」*fi.* taloon, *est.* majja 「家の中へ」内格 (inessive) \**-sna*/\**-snä* 「～の内部で」*fi.* talossa, *est.* majas 「家の中で」出格 (elative) \**-sta*/\**-stä* 「～の内部から」*fi.* talosta, *est.* majast 「家の中から」

## 〔外部格〕

向格 (allative) \**-len* 「～の表面(近傍)へ」*fi.* pöydälle, *est.* lauale 「テーブルの上へ」接格 (adessive) \**-lna*/\**-lnä* 「～の表面(近傍)で」*fi.* pöydällä, *est.* laual 「テーブルの上で」奪格 (ablative) \**-lta*/\**-ltä* 「～の表面(近傍)から」*fi.* pöydältä, *est.* laualt 「テーブルの上から」

いう特徴がある。これは、フィン祖語時代に、語末の *m* が *n* に変化して、対格語尾 \**-m* と属格語尾 \**-n* が区別されなくなってしまったためである。

分格 (partitive, 語尾 \**-ta* / \**-tä*~\**-ða* / \**-dä*) の存在は、バルト・フィン諸語の特徴の1つである。分格は、他動詞文の直接目的語を表示する格の1つとして、属格および主格(直接目的語の表示としての属格および主格を、「対格」とよぶ)と対立し、分格で表示される目的語は分格目的語、対格で表示される目的語は対格目的語とよばれる。対格目的語が用いられるのは、1) 肯定文である、2) 行為が完結、完了する、3) 行為が目的語の表わす対象全体に及ぶ、という条件がすべて満たされる場合で、それ以外は、分格目的語が用いられる(表8を参照)。

バルト・フィン諸語では、存在文、および、その特殊な場合としての所有文は、「存在場所(所有者)を表わす場所格名詞句 + olla 動詞の3人称単数形 + 存在物(被所有物)を表わす主格または分格名詞句」という構文をとる(表9, 例1)。olla 動詞は、英語の *be* 動詞やドイツ語の *sein* 動詞に相当する動詞である。存在文、所有文において、存在物、被所有物を表わす名詞句を主語とよぶことにすれば、分格は、存在文、所有文の主語を表示する格の1つとして、主格と対立する(それぞれ、分格主語、主格主語とよばれる)。否定の所有文・存在文の場合は、一般に分格主語が用いられる(例2)が、肯定の所有文・存在文の場合には、一般に、名詞の表わす対象の性格によって、分格主語となるかどうかの規定される。すなわち、「子供、本、ボール」のように、ひとつひとつ数えられる個体として認識される対象を表わす名詞(個体名詞)の単数形の場合には、一般に主格主語となる(例1a)のに対し、「水、肉、時間」のように、普通は数えられる個体とし

〈表 8〉 対格目的語と分格目的語

—フィンランド語の場合

1. a. Tyttö luki kirjan.  
少女 読んだ 本(対格)  
「少女は本を読んだ(読みおえた)」
- b. Tyttö luki kirjaa.  
本(分格)  
「少女は本を読んでいるところだった」
2. a. Poika ampui karhun.  
少年 撃った 熊(対格)  
「少年は熊をしとめた」
- b. Poika ampui karhua.  
熊(分格)  
「少年は熊を(ねらって)撃った」
3. a. Poika ei lukenut kirjaa.  
読まなかった 本(分格)  
「少年は本を読まなかった/読んでいなかった」
- b. Tyttö ei ampunut karhua.  
撃たなかった 熊(分格)  
「少女は熊を撃たなかった」

〈表 9〉 存在文・所有文における主語の格表示

—フィンランド語の場合

1. a. Pöydällä [Pojalla] on kirja.  
机の上に 少年に ある 本(主格)  
「机の上に本がある/少年は本をもっている」
- b. Lasissa [Tytöllä] on maitoa.  
コップの中に 少女に ある ミルク(分格)  
「コップの中にミルクがある/少女にはミルクがある」
2. Pöydällä [Pojalla] ei ole kirjaa.  
ない 本(分格)  
「机の上に本がない/少年は本をもっていない」
3. a. Koiralle syntyi pentu.  
犬へ 生まれた 子犬(主格)  
「その犬は子犬が生まれた」
- b. Tytöltä puuttuu maitoa.  
少女から 欠けている ミルク(分格)  
「少女にはミルクがない」
- c. Kahvilasta poistui tyttö.  
喫茶店から 立ち去った 少女(主格)  
「喫茶店から少女が立ち去った」
- d. Pellossa kasvaa ruista.  
畑で 成長する ライ麦(分格)  
「畑にはライ麦が育っている」

て意識されない対象を表わす名詞(非個体名詞)や個体名詞の複数形の場合には、一般に分格主語となる(例1b)。なお、olla 動詞以外の動詞にも、主語が同様のふるまいをするものが数多くあり(例3)、この種の動詞は、何らかの意味で、さまざまな様式の存在、発生、消失を表わすと考えられるので、これらを含めて、存

在文(existential sentence)という構文論的カテゴリーをたてるのが慣例である。

分格は、また、2以上の数詞にともなわれた個体名詞がとる形である。

*fi.* mies, *est.* mees 「男」—*fi.* kolme miestä, *est.* kolm meest 「3人の男」

量を表わす名詞にともなわれた場合、個体名詞は複数分格、

*fi.* ihminen, *est.* inimene 「人」—*fi.* joukko ihmisiä, *est.* rühm inimesi 「一群の人々」

非個体名詞は、単数分格、

*fi.* leipä, *est.* leib 「パン」—*fi.* kilo leipää, *est.* kilo leiba 「パン1キロ」

で表わされる。

2) 前置詞と後置詞 バルト・フィン諸語は、後置詞のほかに前置詞も用いる点で、一般に後置詞しか用いない他のウラル諸語と対照的である。後置詞、前置詞とも、属格または分格を支配するのがもっとも普通である。

属格支配：*fi.* kivi 「石」—*kiven alla* 「石の下で」、*fi.* vuosi 「1年」—*ympäri vuoden* 「1年中」、*est.* mets 「森」—*metsa kaudu* 「森を通過」、*est.* jõgi 「川」—*üle jõe* 「川を越えて」

分格支配：*fi.* tie 「道」—*tietä myöten* 「道を(通って)」、*fi.* leipä 「パン」—*ilman leipää* 「パンなしで」、*est.* lõuna 「昼」—*pärast lõunat* 「昼過ぎに」

3) 受動文 バルト・フィン諸語の受動文(passive)は、不定人称文(indefinite person)ともよばれ、動作主に言及しない場合に用いられる構文で、動詞は、受動形(不定人称形)をとる。被動作主は、一般に、直接目的語の格表示をうけるが、対格目的語は、単数でも主格で表示される(表10, 例1)点に特色があ

る。受動形は、人間の動作、行為を表わす動詞すべてにあり、したがって、自動詞文の受動も広く用いられる(例3)。

4) 数詞 数詞は、表11のように、すべてのバルト・フィン諸語において、フィン祖語の体系が保たれている。*\*sata* (<*\*sata*) 「100」は、フィン・ウゴル祖語の時代に、インド・イラン語派から借用されたと

<表10> 受動文——エストニア語の場合

1. a. *Lambanahast õmmeldi soe*  
ヒツジの毛皮から 縫った(受動) 暖かい  
*kasukas.*  
毛皮のコート(主格)  
「ヒツジの毛皮から暖かい毛皮のコートが作られた」
- b. *Nad õmblesid lambanahast*  
彼らは 縫った(能動) ヒツジの毛皮から  
*sooja kasuka.*  
暖かい 毛皮のコート(属格)  
「彼らはヒツジの毛皮から暖かい毛皮のコートを作った」
2. a. *Mune keedetakse neli-viis minutit.*  
卵(複数分格) 煮る(受動) 4~5 分  
「卵は4~5分ゆでる」
- b. *Me keedame mune*  
わたしたちは 煮る(能動) 卵(複数分格)  
*neli-viis minutit.*  
4~5 分  
「わたしたちは卵を4~5分ゆでる」
3. a. *Külas käiakse harilikult pühapäeval.*  
お客に行く(受動) 主として 休日に  
「人のお宅はふつう休日に訪問する」
- b. *Me käime külas harilikult*  
わたしたちは 行く(能動) お客に 主として  
*pühapäeval.*  
休日に  
「わたしたちはふつう休日に人を訪問する」

<表11> バルト・フィン諸語の数詞

フィンランド語	カレリア語	ベプス語	イジョール語	ボート語	エストニア語	リブ語	バルト・フィン祖語
「1」 yksi	üks	üks	üks	ühsi	üks	ikš	*üks<*ükte-
「2」 kaksi	kakši	kakš	kaks	kahsi	kaks	kakš	*kaksi<*kakte-
「3」 kolme	kolme	kūme	kold	kelmeD	kolm	kuolm	*kolmet
「4」 neljä	neljä	nelj	neljä	nellä	neli	nēļa	*neljä
「5」 viisi	vīzi	viž	viz	visi	viis	viš	*visi<*vite-
「6」 kuusi	kūzi	kuž	kūz	kūsi	kuus	kūš	*kūsi<*kūte-
「7」 seitsemän	šeitššimen	šitšeme	seitsemän	seitsē	seitse	seis	*seitsem
「8」 kahdeksan	kahekšan	kahesa	kaheksan	kahešā	kaheksa	kā?dāks	*kakteksan
「9」 yhdeksän	ühekšan	ühesa	üheksän	ühesā	ühiksa	i?dāks	*ükteksän
「10」 kymmenen	kūmmenen	kūmne	kūmmenän	tšümmē	kümme	kiim	*kūmmen
「100」 sata	šada	sada	saDa	sata	sada	sadā	*sata
「1,000」 tuhat	tuhatta	tuha	tuhad	tuhad	tuhad	tu?ont	*tuhante-

される, フィン・ウゴル諸語に共通の借用語である。  
\*tuhante- (<vks. \*tušamte-) 「1,000」は, バルト語派からの借用語である。

5) 代名詞 人称代名詞と疑問代名詞を, 表12に示す。すでに述べたように, 3人称の人称代名詞の違いは, バルト・フィン諸語を2つのグループに分ける際の基準の1つである。

【語彙】 語彙の研究は比較的進んでおり, 歴史的な構造が, かなり詳しく明らかにされている。バルト・フィン諸語の語彙のうち, フィン・ウゴル祖語, ないしは, それ以前の時代(ウラル祖語)に遡る語は, 表13の語彙をはじめとして, 300語を超える。バルト・フィン諸語に固有の語彙の例を, 表14に示す。

比較的古い借用語は, 古い順に,

- 1) インド・イラン系 (フィン・ウゴル祖語, ないしは, それ以前),
- 2) バルト系 (前期フィン祖語時代),
- 3) ゲルマン系 (後期フィン祖語時代),
- 4) スラブ系,

の4つの層に分けられる(表15を参照)。比較的新しい借用語は, スウェーデン語(フィンランド語に多い), ドイツ語(主として, 低地ドイツ語—エストニア語に多い), ロシア語からのものが大部分をしめている。借用語の層に関しては, 「フィンランド語」および「エストニア語」の項に, より詳しい解説があるので参照されたい。

【参考文献】

Laanest, A. (1982), *Einführung in die ostsee-*

〈表 12〉 バルト・フィン諸語の人称代名詞, 疑問代名詞

	フィンランド語	カレリア語	ベプス語	イジョール語	ボート語	エストニア語	リープ語
単数 1 人称	minä	mie	miñä	miä	miä	mina~ma	mina~ma
2 人称	sinä	šie	siñä	siä	siä	sina~sa	sina~sa
3 人称	hän	hiän	hän	hā(n)	tämä	tema~ta	täma~ta
複数 1 人称	me	müö	mī	mō	mō	meie~me	meG
2 人称	te	tüö	tī	tō	tō	teie~te	teG
3 人称	he	hüö	hī	hō	nämäD	nemad~nad	ne
「誰」	kuka~ken	ken	ken	ken	tšen	kes	kiš
「何」	mikä	mi	mi	miGä	mi(kä)	mis	miš

〈表 13〉 ウラル祖語に遡る語彙

	フィンランド語	カレリア語	ベプス語	イジョール語	ボート語	エストニア語	リープ語
*pänyә 「頭部」	pää	piä	pä	pā	pā	pea	pā
*šilmä 「目」	silmä	šilmä	silm	silmä	silmä	silm	silma
*joke 「川」	joki	jogi	jogi	jogi	jetši	jōgi	joʔG
*maγe 「大地」	maa	mua	ma	mā	mā	maa	mō
*kala 「魚」	kala	kala	kala	kala	kala	kala	kala
*elä- 「生きる」	elää	eleä	eʔada	ellāG	elā	elada	jeʔllē

〈表 14〉 バルト・フィン諸語に固有の語彙

	フィンランド語	カレリア語	ベプス語	イジョール語	ボート語	エストニア語	リープ語
「耳」	korva	korva	korv	korva	kerva	kōrv	kùora
「湿地」	suo	šuo	so	sō	sō	soo	sùo
「ことば」	sana	šana	sana	sana	šena	sōna	šenà
「黒い」	musta	mušta	must	musta	mussa	must	muštà
「豚」	sika	šiga	šiga	šiga	sika	šiga	šigà
「大麦」	ohra	ozra	ozr	ozra	ezra	oder	voʔddērZ
「サウナ」	sauna	šauna	—	sauna	sauna	saun	sōna
「一族」	suku	šugu	sugu	suGu	suku	sugu	suʔG
「笑う」	nauraa	nagroa	nagrda	nagrāD	nagrā	naerda	naʔgrê
「縫う」	ommella	ommella	ombelda	ommellaG	emmella	ōmmelda	umblē

〈表 15〉 バルト・フィン諸語のインド・ヨーロッパ語系借用語の層

フィンランド語	カレリア語	ベプス語	イジョール語	ボート語	エストニア語	リープ語	参 考
1) インド・イラン系							
jyvä 「穀粒」	jüvä	jüva	—	ivä	iva	—	サンスクリット yava-
sarvi 「角」	šarvi	sarv	sarvi	sarvi	sarv	sōra	サンスクリット śṛvā
sata 「100」	šada	sada	sada	sata	sada	sadà	サンスクリット śata-
vasara 「槌」	vasara	—	vašsāra	vasara	vasar	vazār	アヴェスタ vazra-「棍棒」
2) バルト系							
seinä 「壁」	šeinä	seiñ	seinä	seinä	sein	saina	リトアニア síena
šilta 「橋」	šilda	šüud	silda	silta	sild	silda	リトアニア tiltas
heimo 「部族」	heimo	heim	—	eimo	höim	aim「家族」	リトアニア seimà
tuhat 「1,000」	tuhat	tuha	tuhad	tuhad	tuhat	tu?ontè	リトアニア túkstantis
meri 「海」	meři	meři	meri	meri	meri	me?r	リトアニア märe
3) ゲルマン系							
lammas「ヒツジ」	lammasš	lambaz	lammaz	lammaz	lammas	lāmbaz	古スウェーデン lamb
pelto 「野, 畑」	peldo	pöud	peldo	pelto	pöld	—	ドイツ Feld
rauta 「鉄」	rauda	raud	rauda	rauta	raud	rōda	古ノルウェー rauði「赤」
rengas 「輪」	rengasš	rengaz	rengaz	rengaz	rōngas	—	古スウェーデン ringer
kauppa「取引」	kauppa	—	kauppa	—	kaup	kōp	古ノルウェー kaupa
rikas 「富裕な」	rikaš	—	rigaz	rikas	rikas	rikkaz	スウェーデン rik
valta 「権力」	valta	vald	valda	valta	vald	vālda	古ノルド vald
kaunis 「美しい」	kaunis	—	—	kauniz	kaunis	—	ゴート skauns 「赤い」
4) スラブ系							
ikkuna 「窓」	ikkuna	ikun	ikkuna	akkuna	aken	—	ロシア ОКНО
tavara 「商品」	tavara	tavar	tavvāra	tavara	tavar	—	ロシア ТОВАР
pakana 「異教の」	pagana	pagan	pakkāna	pagane	pagan	pagānēz	ロシア ПОГАНЫЙ
risti 「十字架」	risti	rist	risti	rissi	rist	rišt	古ロシア КРЪСТЬ
vapaa 「自由な」	—	—	—	—	vaba	vabad	ロシア СВОБОДНЫЙ

*finnischen Sprachen* (Helmut Buske, Hamburg)

Hakulinen, Lauri (1941, 1946; 1961<sup>2</sup>; 1968<sup>3</sup>; 1979<sup>4</sup>), *Suomen kielen rakenne ja kehitys I-II* (Otava, Helsinki)

—— (1953, 1955), *Развитие и структура финского языка I-II* (Изд. иностранной литературы, Москва)

—— (1957, 1960), *Handbuch der finnischen Sprache* (Otto Harrassowitz, Wiesbaden)

—— (1961), *The Structure and Development of the Finnish Language* (Indiana University, Bloomington)

Turunen, Aimo (1988), "The Balto-Finnic Languages", in Denis Sinor (ed.), *The Uralic Languages. Description, History and foreign Influences* (E. J. Brill, Leiden)

*Suomen kielen etymologinen sanakirja I-VII*

(Suomalais-ugrilainen Seura, Helsinki, 1955-81)

[参 照] フィンランド語, エストニア語, カレリア語, ベプス語, イジョール語, ボート語, リーブ語, ウラル語族

(松村 一登)